

# 幼児保育の藝術性

倉 橋 惣 三

あなたのどこが眞に幼児保育者なのか。何があなたを眞に幼児保育者とならせるのであろうか。つまりは、幼児保育者の幼児保育者たる眞諦は何なのであろうか。こうした問いに對して、いろいろの答があるであらうし、さまざまに答えられるでもあろう。その答えの一つとして、あなたは幼児の心を知る人でなければならぬ。また、あなたは幼児の生活を保護する人でなければならぬ。更にまた、あなたは幼児の生活を導く人でなければならぬ。いづれも、幼児保育者として、缺くことの出来ない研究であり、仕事であり、教育である。その必要と重要とは、あらためていうまでもない。その一つ／＼が、それ／＼大切なことであり、それ／＼として貴重なことである。しかし、これらのそれ／＼が幼児保育でないのももとより、これを合せただけでも幼児保育になるものではない。これらの一つを缺いでも、幼児保育は完うせられないが、これらが揃つてゐるからとて、それで幼児保育が完いものではない。——というのは、これより以外になお必要なものがあるというのではなく、これらを包括し、これらを積

載し、これらを糾合する、もつと大きく、廣く、深いものがありはしないかという問題である。わたしは、それを、幼児保育の學問性、社會性、教育性に對して、幼児保育の藝術性という言葉であらわそうとする。但し、藝術性という言葉は、必ずしも簡明な言葉ではない。その各の面にそつて、ちがつた意味を持たせられる。藝術の本質である美ということにしてさへも、極めて淺いところ、甚だ浮いたところで解せられたりすることがある。すなわち藝術的とは、随分あいまいに使われたり、偏して用いられたりする言葉であるが、わたしがこゝで此の言葉によるのは、その渾然たる非分離性、全的な融合性に基いてである。——またしても究屈な言い方になつたが、理窟や必然や目的を超えたいつとつりした境地としての意味においてである。うつとつりといつて、理窟や必要や目的を捨ててゐるのではない。或は必ずしも忘れてゐるのではない。それらをすべて包括し、積載し、統合してゐながら、それらに分離しない前の、また、それらを一につに融合している境地という意味である。藝術にも、音樂にも、學問

性も社會性も教育性もあるのであるが、美術音楽それ自身の本質は、それらそれ／＼の寄りあいでも寄せ集めでもない。一個の藝術である。すなわち、その本質性は藝術性である。——そうした意味あいでは、幼児保育も藝術性をもつものであり、藝術性をもつのでなければならぬと、そういうふうとされているのである。

児童心理學は、幼児の心を理解させてくれる。今日において、児童心理學の研究なしには幼児の心は理解出来ないといつてゝ位である。がしかし、理解だけで一人々々の幼児の心に觸れられるものだろうか。それは、どうしても藝術性（前にいつた意味で）のものでなければ出来ぬ。児童心理學で、幼児と共に泣けるか、一つ心に喜べるか、又、社會現實の逼迫感が幼児保護の急務に赴かせるのも常である。その現實に對する直視と憂慮とから、周到と懇切の感謝すべき多くの社會保護が生れる。がしかし、その專業的周到だけで一人々々の幼児の心を幸福にし得るものであろうか。これまた、どうしても藝術性のものでなければ出来ない。というよりも、保護が幼児の心を幸福にしているのは、いつでも、單なる保護のみでない藝術性によつてゐることなのである。それは愛とということであるといつてもいい。愛こそ最も高貴な（恐らく最も美な）人間藝術なのである。更に又、教育的理想は、幼児指導の目的を發せしめ方法を工夫させる。保護と相俟つて必須なのは言を俟たない。がしかし、目的と方法だけでは、

一人の幼児をも抱くことも出来ないし、幼児を親しませることも出来ない。これまた、どうしても藝術性のものでなければ出来ない。というよりも、目的と方法とによる指導を眞に教育ならしめ得たるものは、その藝術性に他ならぬのである。こう考えて來て、あらゆる場合、幼児保育を眞に幼児保育ならしめる本質とは、その藝術性であるといえる。

幼児の研究は大に進歩した。幼児保護の必要は日々われらを驅り立てる。幼児教育の重要は愈々明確を加える。これによつて、幼児保育は、學問的に、社會的に、教育理念的に又教育技術的に發達する。幼児の福祉上教育上まことによろこぶべきである。この發達は一日も忽がせにしてはならぬ。このよるこびは、益々擴大されなければならぬ。がしかし、これだけで、幼児保育の藝術性が充實されているとは簡單に考えられない。若し危惧の目を以てすれば、幼児保育の學問性、社會性、教育性が強調され、急に前へ押し出されることによつて、その藝術性が微弱化され、時に後ろへ置き去りにされることはなかるうか。根がうつとりを特質とする藝術性である。うつとりはうつかりにまぎらわしく、うつかりをうつとりと取りちがえられないとも限らない。——が、それでは決して眞の幼児保育があり得ない。

幼児保育の藝術性を、はつきりと定義することはむづかしい。名畫の美を言葉で説明しつくせないと同である。しか

し、それを的確に見ることは出来るし、把握する(藝術的に)することも出来る。たとえ、コメニウスや、バセドウや、フレーベルの著作や生涯に、それを感得することは誰れにでも出来る。丁度名畫や優れた音楽の中に感得し得る如く、その藝術性にうつとりさせられる。他の言葉でいえば酔わせられるところがある。それは古典的なことに他ならぬといわれるかも知れない。或はそうかも知れない。現代の學問も、社會事業も、教育も、理論と必要と方法どが先きへ先きへと進むことによつて、その本質としての藝術性が、追いつき兼ねている趣きがある。忙しいものの免れ難いところであるかも知れない。しかし、その現代にあつても、眞の保育實際の中には、それらの諸性を超えて、うつとりとした境地に酔うものも少くないし、酔う時も屢々ある。如何に藝術性の少ない、あわたとしく、またかわききつた今日のわれわれであるとしても、幼児の方は、變りなくいつも藝術性そのものだから、それに化せられずにはないのである。心理學を考えながら近づいていつても、幼児は超心理學で飛びついて来る。事業施設として集めても、幼児は被保護者としてではなく我かまゝもいえば、いたすらもする。あまつたれて来るに至つては全く藝術的であり、それにつれられて溶けてゆく瞬間は全く藝術的である。教育で教育を考えている人でも、遊びの中に誘ひ込まれてうつとり遊んでいる姿には、藝術的などという言葉以外の言葉では形容出来ない姿が出る。それは屢々若い先生の姿であり、老熟(老巧ではない)の先生の姿であり、そ

れに見とれているわれらの姿でもある。なんとという嬉しい姿であろう。姿というよりも、幼児の喜びと幸福とであろう。——それに比して、藝術性のない保育の、なんと幼児につまらないこと、不幸なことであろう。

幼児保育の藝術性は、それ自體が藝術性の持ち主である幼児から與えられずにいないものでもある。しかし、折角の名畫や音楽に、藝術を感じない没趣味もないでもない。無感動の不風流漢にとつては、どんな豊かな自然美も藝術にならない。そういう先生にあつては、幼児もたまらないし、保育という貴い藝術も、功利以外の何ものでもなくなる。あぢけない至りというよりも、許し難い胃潰れともいえよう。そういうことのないためには、われら自らに、藝術性の持ち主、保育をたゞの仕専でなく、その趣味に溶け込み、うつとりと酔い得る性を持つ人でなくてはならぬ。言いかえれば、保育を何んのためにし、如何にせんと考へるほかに、保育を楽しみ、保育に没入し得る人でなくてはならぬ。そういう先生と幼児との間にのみ、何ともいえない保育藝術——保育學、保育事業、保育技術以上のもの——が創作されるのである。その保育そのものが藝術になるのである。その場合、その先生の心境は、畫家が描き、音楽家がうたい、詩人が詩作するのと同じであり、恍惚として我れをその生活のうちに満しつゞけるであらう。前に、コメニウス、バセドウ、フレーベルの保育畫面を偲んだのも、そうした藝術的價值にほかならない。

それらの畫面には、幾多の大きい價値が含まれてゐると共に、一大藝術としての渾成に頭が下がるのである。

但し、これらはいづれも稀世の大藝術品である。そんな大作でなくても、小品は小品なりに、短章は短章なりに、小さいながら純藝術品の本質をそなえるものがある筈である。そうした藝術性が、幼児のあそびを観察してゐる瞬間にも、幼児の爪をとつてゐる窓ぎわにも、幼児の自由畫の手さきを見つめてゐる机の上にも、ふと動き、しみじみとつゞいて、貴い小藝術品を成すことがある。若しそれが日々連続し、園一ぱいに擴がれば、その人は、身を以て保育を藝術的に創作しつゞけてゐる人となる。たまに色のぬりそこないがあり、線の描き誤りがあつたとしても、その純乎たる藝術創作としての價値は、たゞ正しく、たゞ細緻に、たゞ上手なだけの非藝術品にまさること、如何に大であらう。そうして、その美しい作品は、古典の大作に例を求めたでもなく、若い保育者の、その日その日の保育の中に見出されるものである。――たゞ、現代的な保育畫面が、徒らに大がより大仕掛であるのみで、粗大、空虚、頓と藝術性の乏しい憾みが稀でないのを、なげかずにいられない。

再び初めの問いにかえる。あなたのどこが眞に幼児教育者なのか。何があなたを眞の幼児教育者にならせるのであらうか。つまりは、幼児保育者の幼児保育者たる眞諦は何なのであらうか。

前に屢々、名畫名音樂といつたことから例をとる。レントンは名畫を制作した藝術家であつた。ベートンヴェンは名音樂を作曲した藝術家であつた。たゞ繪描き、たゞ作曲家ではない。藝術家であることが、その本質であつたのである。勿論、繪と音樂とにおいて、その藝術性を發揮した。しかし、藝術家たるものが、その奥底の眞諦であつたのである。こうした特異の大藝術家を例にとらないでも、藝術家が描いた繪だけが眞の藝術であり、藝術家が作つた作曲だけが眞の藝術であることは論を俟たない。そこで、あなたは幼児保育者という人間藝術家である。人間を最も深いところ、最も純なところで相手とするものは皆人間藝術であるが、他の場合は藝術的だけには止まり得ないことが多々あるとしても、幼児を相手とする場合は、その藝術性は最も深いといえないかも知れないが、最も純なるものである。その最も純な藝術性が幼児保育の眞諦であり、あなたの藝術性があなたを眞に幼児保育者にするものであり、あなたはあなたの藝術性を以てこそ眞に幼児保育者なのであると、こう答えても過言であるまい。少くも、あなたの保育を眞にし大にし高貴にするものは、あなたの學問性、社會性、教育性のほかに、あなたの藝術性（こゝでわたしの言う意味で）あらねばならぬ。